



板四小と板五中 心ゆたかな学びのエリア 令和8年度

学校の窓 9月号

板橋区立板橋第四小学校

HP <https://www.ita.ed.jp/1310270>

「当たり前」の幸せ

校長 堀内 祐子

45 日間の夏休みが終わり、子どもたちの元気な声が学校に帰ってきました。夏休みに入ったとたんに猛暑日が続く、今年も暑い夏でしたが楽しい思い出を作ることができたでしょうか。

今年の夏休みは、7 月 28 日に発生した「令和 8 年熊本地震」、8 月 13 日から 14 日にかけての「令和 8 年 8 月千葉豪雨」、そして 8 月 23 日午前 2 時、関東地方で震度 5 弱が観測された地震など、多くの災害がありました。熊本地震では、多くの方が被災され、未だに避難所生活を送られている方もたくさんいると聞きます。（熊本の子どもたちはどのような夏休みを送ったのでしょうか。）私は今、この学校便り「学校の窓」をエアコンの効いた校長室で書いていますが、熊本では猛暑の中、エアコンもなかなか使えない状況が続いていたと聞いています。

東京都の学校では教室のエアコン設置率は 100%（全国 99.6%）、体育館のエアコン設置率も 97.2%（全国 40.8%）です。しかし、ガスや電気、水道等のライフラインが止まってしまったら、学校のエアコンも使えません。今ではエアコンがあるのが当たり前の生活になっていますが、当たり前が当たり前でなくなるのが、災害の恐ろしさではないかと思います。私たちが「当たり前」と思っている日常の安全や健康、他者との関係が、実はいかにもろく、どれほど多くの支えによって成り立っているかを考えさせられた夏休みでした。だからこそ、実はどれほど多くの事件や事故、トラブルが「起きなかった」ことによって成り立っている「何もない普通の日」を大切にしたいと思いました。

エアコンだけではなくありません。子どもたちが、当たり前前に学校に来て、勉強し、遊び、生活するためには、先生方、事務や用務の方々、給食の方々、PTA のの方々、保護者の方々、地域の方々等、実に多くの人のお力を借りています。当たり前前にできることは、決して当たり前ではないということ、当たり前前にするために多くの人が陰でしっかりと支え、協力してくれているということに、子どもたちにはぜひ気付いてほしいと思います。また、「してもらっている」ことに気付くことは「大切にされている」と気付くことにもつながります。

話は少し変わりますが、1980 年代に流行した「くれない族」という言葉があります。他者や環境に対して「何もしてくれない」「〇〇してくれない」と不平不満を募らせる人々のことを指します。その背景には「自己肯定感の低さ」や「自分は大切にされていない」という思いがあるそうです。くれない族の人は、自分に何ができるかを考えず、人が何をしてくれるか、だけを考えます。でも、私は、それだけではなく、「してもらっていること」に気付かない、気付くことへの感受性の低い人たちなのではないかとも思います。

今日から 2 学期のスタートです。2 学期は、多くの方の協力や支援がなくてはならない、板四スポーツフェスティバルや学習発表会等、大きな行事が予定されています。板四小の子どもたちは「くれない族」になることなく、多くの方の支えに感謝の気持ちを持ちながら、学習や行事を通して大きく成長してくれることを願っています。

そして、「令和 8 年熊本地震」や「令和 8 年 8 月千葉豪雨」で被災された方々が、一日も早く「当たり前」である幸せを感じられる日がくることを願っています。